さびのさと

NO.89 月刊

第三輯　寺院篇　第十六号

昭和四十年十一月一日　発行　（非売品）

岡山県都窪郡吉備町東町一二五字垣方　呼電四三七番

吉備観光協会

第88号つづき

○中正山了性寺（その二）

当山の墓地にある住職の墓標

一　十世　見明院日照墓　天明七丁未暦六月上浣五日

一　純明院日堤　覚位　文化七庚午年十二月十三日

一　永寿院日円大徳　文政五壬午天六月十日撰州能勢岡崎邑之産（芋墓）

一　貞成院日親大徳　文政十二年丑四月四日妹尼産（芋墓）

当寺住職中興日修行余力ヲ以テ田字菊示一反歩五重高一石八斗ヲ附之

一　浄益院日秀比丘　天保十八癸丑天六月上浣九日

一　境性院日能聖人　天保二辛卯極月廿七日（芋墓）

一　実相院日衆法師　大阪産明治十一年寅十一月二日金若円安詔人野上金吉本堂寄附（芋墓）

一　南無妙法蓮華経　本昌院日遵聖人当山十三世中正院十五代　奉謝読妙経百部之遠偈五十巻　明治廿一子年五月廿日江化鳥取県伯州八橋郡笠見村八橋産　字小迫田　虎餞五畝十七歩回向料寄附之

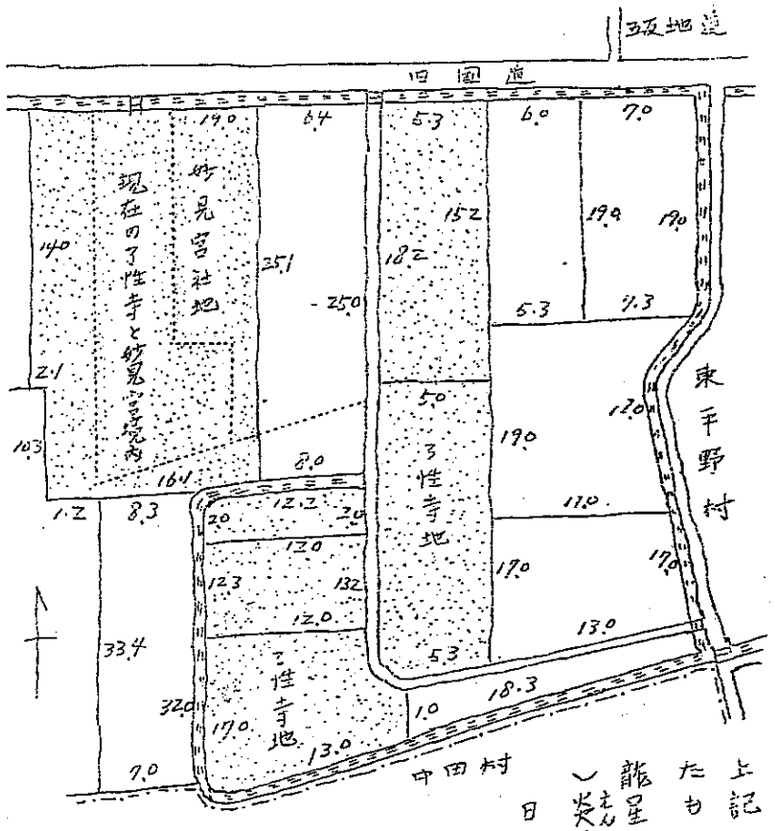
一　智田院日進法師　明治廿五年旧正月九日　施主信徒中（芋墓）

一　隨妙院智善日種禪尼　明治廿九年旧七月廿五日

一　本具院智仙日浄法師　明治廿六癸巳年九月十八日

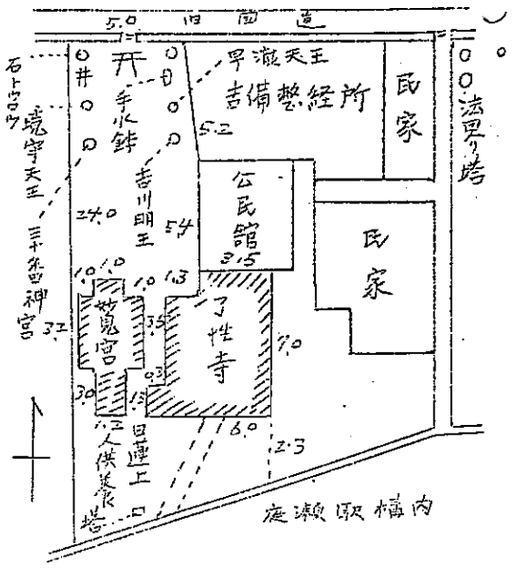
中正山本堂金壱百円新築寄附者也　長野　安井姓産

日浄法師以後住職の墓石はない。思うに中正院に葬しその兼帯に置かれていたものであろう。



上記の地図は嘉永年間の地割図の一部を写したもので、原図の表紙に「嘉永六癸丑龍集（りゅうしゅう）（龍星のやどることで、その年の終りに用いる）炎霧（夏の最中のこと）雜麟日（きりんび）（めでたき日のこと）模馬（しゅんりょう）当役　太田元四郎謹蓋　論者　備前　春鶯草（しゅんおうそうせき）叶石」とあり。この原図は荒尾の庄屋太田助内の所持するものを写したものである。

（数字は間尺で示したが、図面とは正確でない）。



一　近藤氏聚代の墓所

一　聯花院悠山日遠　宝暦十三癸未年正月廿日近藤俊左

一　紫量院妙悠日円　門順信（うくまり）。

非道治平時竜内門人一朝竜昊山

一　露峯幻露　霊　明和八辛卯天四月十七日卒

近藤典兵衛順実之墓（亀型の台石を用ゆ）

一　妙義院覚達　明和八年辛卯三月二日　近藤和平次利器　墓

一　風香院故諡日上　天明七丁未霜月上浣六日　近藤佐左衛門恒明
　　真寿院妙順日達

一　冬雲院是樂日遊　文政二卯歳十一月廿二日　為和歌道師　号春秀
　　（国学に長じ名は嘯蔵本居宣長の門人である）

一　玄収院宗要日信　天保三壬辰年閏十一月十三日近藤和左衛門寛恒享歳六十三才
　　（八幡神社の石燈の銘にこの戒名が刻まれている）。

一　玄受院妙要日収　安政二乙卯年十月三日　俗名さなき享年七十六才

辟花院の墓碑に刻まれている半時庵は京都の俳諧師にして、号を淡々といい寛暦四年に歿しているので一朝庵吳山の孔は師匠の歿後八年のちである。当時吉備地方には俳壇が盛んにして多くの俳人が輩出していた。淡々は姓は松木氏にして大阪の商人の出である。延享五年の生れで、早くから俳諧に志し、芭蕉翁について学び呂国と号した。江戸に下って榎本其角（きかく）にも親しく享保年間には京都へのぼり、俳諧の道一途に生涯を送り、晩年には和泉の堺に住して寛暦四年に八十八歳で歿した。当時京都では俳壇は盛んで京都官庁の記録には宗匠三十一名を数えているが、なかでも淡々の一派はその名を鳴らしていた。

俳諧とは滑稽という意味である。この文学の始まりは上代に逆る連歌（れんが）から起ったものである。最も栄えたのは室町時代といわれている。これは何人かの人で歌ったものを、最初五七五の一句をつくると次の者がその意味が続くようにヒヒの一句をつくる。これを数人のものが交互に順番につくって長く続けていくのである。僧の拙清やニ條良基、飯尾宗祇らが連歌師としての代表的である。この文学が受けつがれて江戸時代の初期に松永貞徳（貞門風）や西山宗因（談林風）等によって一般庶民の間に流行した。元禄時代に松尾芭蕉（蕉風）が貞徳の連歌を滑稽味に陥入り過ぎたので、芭蕉翁は連句と発句の二種類をこしらえたが、連句は次第に作らなくなり、専ら発句のみを俳諧というようになり、明治まで続いたが、正岡子規が発句を俳句に改めたのである。

一　幻露妙空　明和五戊子天七月十八日　近藤氏　去名　近藤右男二貞嗹

一　夏雪院宗晴日鮮　寛政七乙卯歳六月廿二日　近藤此右衛門嗹人

（英作の勝山藩士景山光躬は元文二年二月に浪華（大阪）に赴いて淡々に師事して俳道を学んだことがある。明和七年に淡々の十七回忌に当り勝山の化生寺で供養を営み書院碑をたてて文塚集しニ巻を上梓している。上詠者吉備人八十七人を録している。この晩稿は字を成行といい、雅号を受紫という。本姓は田中氏で後ちに景山氏を嗣いだ人である。別に蓋卿、蠖姑戈、柳々人などの俳号がある。或る年伊勢に赴いて俳句をつくった時、堂上家に聴えて潦湖翁の号を授かり青千と号した。愛紫が年時庵に学んだのは壮年になってからのことである。勝山地方に淡々系の隆昌を極めたのはこの人が傳えたのである。蛙経、文塚集等の著書がある。安永八年九月廿二日六十九歳で生涯をとじた。遺骸は勝山の本町の阿弥陀堂の傍に葬った。

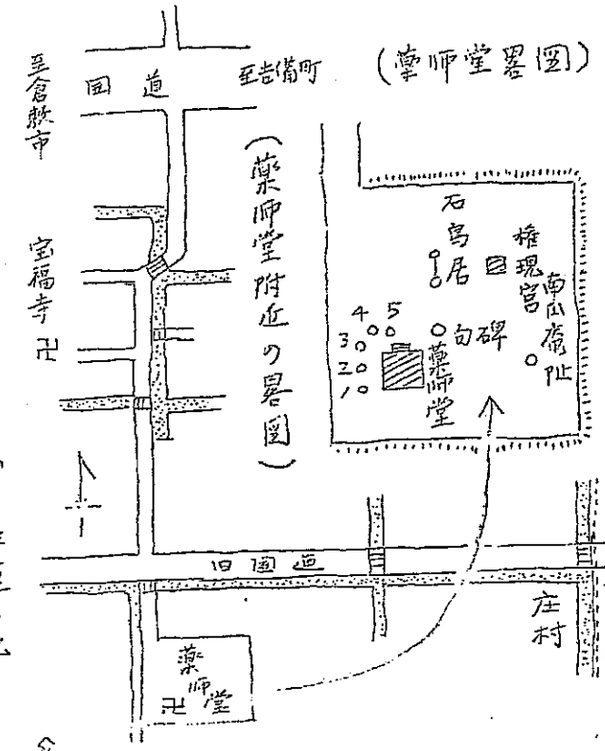
俳人も淡々に学んでいる。雪江は姓を石井、諱は義智、通稱は治左衛門といい矢掛の年寄にして安永五年三月二十日に六十九歳で歿している。また芭蕉翁の門下で別派として吉備地方で名おなしたのは南氏坊除風である。除風は延宝の頃備中の八田部の出といわれ、中頃倉敷に住んで真言宗の僧となったが寺を持たず元禄十一年から今の庄村下庄四国道の南側（吉備町の境から西へ五百米いった處）の藥師堂（もと阿知神社の神宮）、大島義里（倉敷の豪商、いまの倉敷郵便局がその屋敷址）宮内の藤井（大坂）高安（吉備津神社の神官）、玉島の小野梶邑（上成の富豪家）などがあり、常にここに会して俳道に樂んだが、十年あまりで甥如南氏庵を出て四国に渡り讃岐の興国寺の側に一夜庵という草庵を結んで風流を楽み、延享三年正月十三日病んで歿した。年齢は傳っていないが年歴から推測して七十歳以上の高齢でなくなったと思われる。

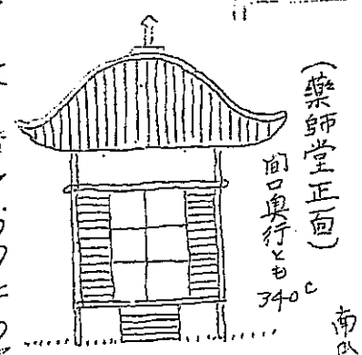
この南氏庵は近年まで古い建物が残っていたが、いまは畑地になっている。台石を有する地上高さ一二一糎の墓標がある。ここに不審を抱くものは翁が吉備地方を旅行したことを聞かないのに、なぜ下庄に墓標がたてられているかと云うことである。これは室永元年に除風が千句と詠じた記念に師恩芭蕉翁を追悼して建てたもので、俗に千句塚ともいい拝み墓なのである。除風がこの庵を去ったのは室永二年の十三回忌をすましたその翌年の頃と考えられる。

芭蕉翁は本名を松尾宗房といい伊賀上野に生れた。父は貧しい手習師匠であった。幼

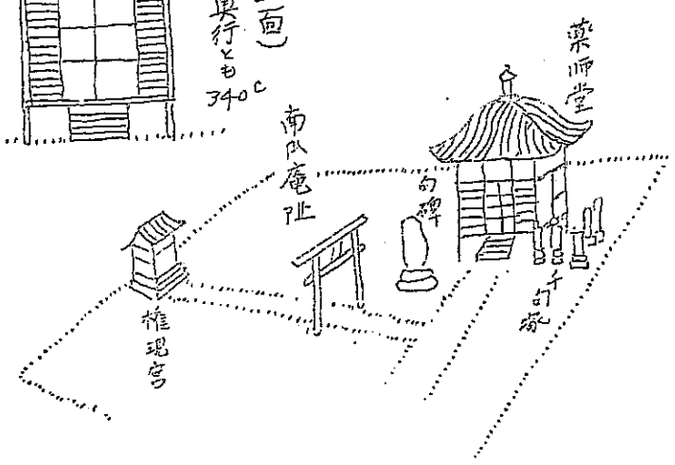
時藩主藤堂家の若君良忠の小姓を勤めたが、廿三歳の時に良忠が病死したので、主家を辞して俳諧を学び一定の住家もなく諸国を放浪してから新しい俳風をつくった人である。有名な宗匠であることは周知のことと思う。また旅行家としても知られ、紀行文の大家に俳諧の特色をとり入れて新しい日本文学を生かしている。「奥の細道」はその代表的のもので紀行文の傑作といわれ、後世愛読されているものである。翁は奥羽地方の長い旅を終えてから不病で健康を害しているにも拘らず九州の旅に出で、途中大阪の宿で俄かに病が重くなって元禄七年十月十二日に「旅にやみ夢は枯野をかけめぐる」の辞世をのこして五十一歳で歿した。

（墓所堂暑図）





（東北から見た鳥瞰図）

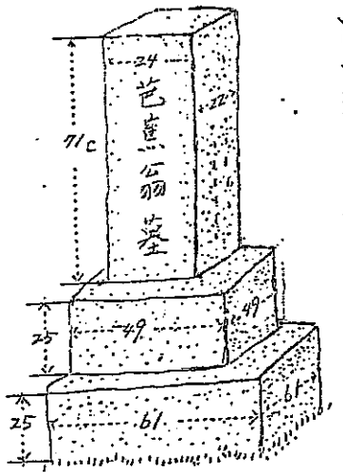


芭蕉翁の埋め墓は源平の合戦に非運の死を遂げた木曽義仲を葬っている近江の国義仲寺へぎちゅうじ）の傍にある。これは翁の遺言によるものである。墓の傍の句碑に「木曽殿と背中あわせの寒さかな」は翁の門人で接李其角の作である。

×

薬師堂は俗に辻堂ともいい内陣に薬師如来と弘法大師の木像を奉安している。創立は判然としないが、いまは真言宗宝福寺の管理に属している。屋根は特異な神輿形の本瓦葺であり、いまわ支柱を周囲にたてて倒壊を防いでいる。

薬師堂の右側に数基の墓標がある。①　天保三辰天三月廿一日　奉願拝西国二十一度　円治良。②　文政五年午七月廿六日　恵覚庵住　中邑産。③　寛政八丙辰天四月廿九日　閑性禅門。④　千句塚　右面　元禄七甲戌歳十月十二日　正面　芭蕉翁墓



⑤　石地蔵尊ニ休立像。

薬師堂の左手に二段の名石の上に一三。俳の自然石を置く陣風の句碑がある。

「眼をここに飛らくほとけや千々の花　陣風」

表面に「眼」

裏面に「南氏庵跡　南氏庵者陣風舊棲跡也陣風備中総社産級身伊門汲真言流風入芭蕉翁門趣俳諧其名冠中国自元禄渉宝永結庵此地居及十年出東游西歴叩好士之門人行脚恩後住讃岐観音寺望再興一夜庵近享三年正月十三日以高齢歿矣今茲正当忌刻石遺句記念之而　昭和六年辛未三月初一　上羅侍中撰」。と刻んでいる。

△　日学聖人に帰依したといわれる火燈松近藤家の累代の墓は前に書いた了性寺の墓地にあるものの外、信城寺内にも十二基ある。これは了性寺の墓石よりも古いものと、又新しいものとがある。近藤家はその先祖は源尾藩蒔田氏の知行所三須村（総社市）に住し大畜豪家にして平野村が昔ニ須領であったので正徳、享保の頃にこの地へ移って名主を勤めた

家筋である。現に文久元年祭礼の備中村鎧に「平野村　大庄屋　近藤吉衛」と記載している。明治になって子孫は三俣村に住したが正系は絶え支族のものが後年三俣村の墓を信城寺に移したという。いま平野あたりでは城主様といっているが、ここに城跡のあったことを聞かず近藤家の遠祖がどこかの城主であったかも知れない。或は領主に適じる名主から轉訛した口傳でわかろうか。

信城寺にある墓碑は

妙法心月摂源童子　近藤米蔵　安政元年二月廿六日
妙法善静院妙心敬信女　明治十九年　〃
妙法紋天院妙月日照　安永六巳丑年　〃
妙受童子　〃
妙法円解院了融日諦居士　〃
深達院妙意日相大姉　〃
妙法理性院妙映日徳　〃
香林院妙雪日薫　〃

（以上年月不詳）

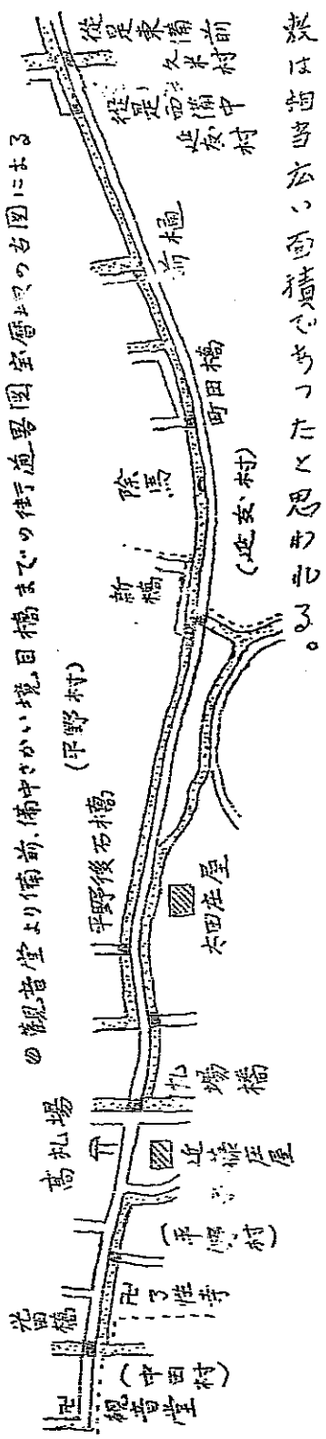
裏面に「辞世　顔淵を思へばけふ夏の夜の夢のあったろうと思われる。顔淵も夏の候に死去しているから」で、顔淵の高徳を慕い形而下に表現し、詠んだのであろうと考えられる。

近藤姓はものの本に遠祖は藤原氏の後裔である。近藤の外に後藤姓がある。近藤は近江の国の藤原氏から出で、後藤姓は越后の国の藤原氏から起った苗字である。

顔淵は顔回ともいい、いまから二千五百余年の昔、儒教の祖である中国の孔子の高徳で多くの弟子の中で最も学問を好む人である。竹の折りの飯と、一杯の瓢酒しかない粗食をとり、そしてきたない街に住居している。普通の人であればその生活に憂ふるであろうが、顔回は全く平気で学問道徳を楽んでいる。誠に見上げた立派な人である。と、また「有顔回者、好学不遷　怒不貳過　不幸短命死矣　今也則亡　未聞好学者也」。顔回は学問を好み怒ることがあってもその人に決してつらあてをしない。また一度過まった時は二度とくりかえさない。不幸にして短命で若死した。それ以后学を好む弟子がない。尚在用には学問を好むものがあるように聞かない。と書いてあり終りに「これを仰ぎはいよいよ高く、これを鑽きしればいよ〳〵堅く……」。と孔子さえ賞賛している賢れた人物である。徳川時代にはこうした中国文学が国学として取り入れられ、倹約と質素ということを圓熟教育の基盤としていたのである。当在では逆に奢侈とか贅沢の暮しをしていないと立派な人だと思っていないようである。

妙法清蓮童子、妙因童子　一、妙法蓮達院妙香　（宝暦頃か　その他不明）
積功院守信日正居士　守信院妙宣日精大姉　〃
守円院徳日昇居士　明治三十五年三月二十四日長男昇吉廿九才
善浄院妙覚日慈大姉　明治十九年八月二十一日　長女　善せとさ
不変院境内の日蓮上人四百五十遠忌建立の石碑の傍に石燈籠の軸石が残っている。その銘に「孝寄進　享保十六辛亥天十月十三日　近藤吉定妻」とあり。近藤家の祖先である。

近藤家の屋敷跡は山陽線平野踏切の西、今の能代寿太郎の宅地になっている。その宅地の東北隅に阿倉大明神という小さな祠がある。これは近藤家の女中阿倉女が悲惨な死をとげた霊を祭ったものである（第十編伝説篇阿倉明神参照）もとここから北へ約十米の處に一本の松樹があってそのもとに祭祀していたが、鉄道用地に買収されて現地に移した。田屋数は相当広い面積でもったと思われる。



の観音堂より南前、備中さかい境、目橋までの街道要図室暦頃の古図による

○ 了性山中正院

当山は日蓮宗にして栄町本通りの南側にある。山門に入る左側に高さ二尺、はかり蓮瓣形の石面を平たに削り「南無妙法蓮華経　南無日蓮大菩薩、南無大覚大僧正」と三列に刻み、傍に「安政六巳未歳　当所　講中　四月廿八日立之」とある題目石碑がある。

（講というは物事の意味をときあかすことであつて、佛教が栄えた平安朝時代の初期に寺院に集まつた信者たちに僧が学問の講義や佛法を説いたことに始まつたものであるが、後世になつて講義を聞くものが多数集つて飲み食いしてお喋りをする行事に趣きを置く意味にかわつてきた。またこの講中の人たちのなかに貧しい人がいて、金策に困まつている時に僧侶が責任をもつて講中から金を出資させこれを人に融通した。これがいまの無盡講とか、頼母子講の起りで、責任者になるものを講元というのである。昔旅行をする時に旅宿に、本陣、脇本陣、平旅籠屋　本賃宿などの階級的区別があつて安心して宿泊することを選ぶのが困難であつた。そこで真白目な宿屋の組合が出来た。これがやはり講といい、いまから百五十余年も前に「浪花講」というのがもの本に最も古いとされている。旅行する人は講元の発行する旅行切手をもつて、気安に泊り、料金も割引してもらう仕組である。これはいまの「クーポン」とか「シンボジウム」とかいうのがその制になつたものであろう）。

山門を入ると正面が本堂、右に庫裏。本堂の裏に客殿があつて昔の潘源に面している。左に高さ二尺余りの自然石に「忠魂碑」とした旧庭瀬町出身の戦死勇士の大碑がたてられている。「身延鋼法日慈書　大正三年七月建之　当院廿一世日明代」と刻んである。これは在郷軍人会庭瀬町分会渡米者三十一名外に四十八名の寄志寄附によるものである。その南側本堂に接して「妙法蓮華経華草品第五」と刻んだ石碑がある。

本堂は入母屋造本瓦葺屋根にして向拝附、間口七間奥行五間である。中央の内陣には法祖日蓮上人の坐像を安置し、右脇に能本城主であつた同宗の大檀越加藤清正を牽安し左脇には檀家の位牌多数を祭つている。当寺は創め川入本村の三十番神社のあたりにあつたが寺を庭瀬藩主戸川氏が慶長の頃、中正院日学聖人という高僧をして不変院の塔中に移し再興したと傳えられている。いまの三十番神社は昔当寺の鎮守であつたらしい。いまは墓地になつている。よつて日学上人をして当山院と大乗院の間の田地がその遺跡でいまは墓地になつている。よつて日学上人をして当山の開基として仰ぐのである。寺名について考へるに中正院の寺宝の曼荼羅の掛軸に「慶長十二年三月今日　中正坊日学授施　日詔花押」と銘がある。日学上人が示寂する廿五年前のものにして、もと中正坊というたのを、後ちにいまの中正院に改めたことは確実である。（日詔はもと池上本門寺の十四世の座主になつた高僧で、不受不施派のため元和三年四月十九日四十九歳で幕府の召喚に能れて軟着されている。即ち慶長十二年は日詔の三十九歳の時である。日詔は福田村山田の鐘場の出身にして、古い石碑が在所にあることは後に婦人物篇日詔上人で詳しく述べた通りである。）

其後大災にかかり再建のことが口碑に傳わつているが、文献がないのでわからない。その建物も腐朽したので、明治廿七年に不変院の玉泉院日信聖人が晋山して漂戦を募り現地を拡して再建したのがいまの建築物である。用材は松林寺が焼失した際再建のため使用した絲材を譲り受けて建てたものである。

（おわり）この項末完

〃タクシーの御用命は〃
吉備タクシー
山陽線　庭瀬駅前
吉備局電 58番 / 310 / 351
有線 1901番

吉備町・中田
廣井鉄工所
吉備局電 6306番
店主　廣井時雄